

解答

③

傍線部の一文は、使役形と否定形を組み合わせた形になっている。まず、使役形に着目すると、傍線部後半の「使有生之類受無量怖苦」の訓みは「有生の類をして無量の怖苦を受けしむ」となる。よって、「受くる使ひ」とする①・⑤と、「有生の類の」とする④は、この形を踏まえていないので誤りである。

次に、否定形であるが、傍線部は「不復」と「不」の下に副詞の「復」があるので、「また〜(せ)ず」と訓み、**部分否定**で「二度と(今度は)〜しない」の意味になる。

部分否定と全部否定の違いは大丈夫だろうか？ ポイントは、副詞も否定語も下にくる内容にかかるといことだ。だから、「否定↓副詞」の語順ならば、副詞が否定されるので**部分否定**となり、「副詞↓否定」の語順ならば、否定に副詞がかかるので**全部否定**となる。

不復↓復た↓だを否定⇨二度と(今度は)〜しない⇨**部分否定**
 復不↓復た↓だを否定⇨二度と(今度は)〜しない⇨**全部否定**

仕組みを理解したら、あとは形で覚えよう。問題に戻ると、残る②と③のうち、②は「復(かへ)るに」という訓みが誤り。「復(ま)た」と訓む③が正解である。

なお、文末の「耳」は、強意・限定の助字で「のみ」と訓む。疑問・反語の「や」という訓みはないので、この点でも②は誤りである。文脈から考えても、蘇文忠は獄中での艱難の経験から生き物に量り知れない恐怖や苦しみを与えたくない(受けさせたくない)と思っているのであって、受けさせることを致さないだろうかと問いを投げかけているわけでも、いや致すと言っているわけでもない。

選択肢チエック

問

傍線部A「**不復**以**口腹**之故、**致使**有生之類**受無**量**怖苦**」の書き下し文として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。
部分否定「二度とくしない」
使役

- ① 復た口腹の故を以てするも、有生の類の無量の怖苦を受くる使ひを致さざるのみと
- ② 復るに口腹の故を以て、有生の類をして無量の怖苦を受けしむるを致さざるやと
- ③ 復た口腹の故を以て、有生の類をして無量の怖苦を受けしむるを致さざるのみと
- ④ 復るに口腹の故を以てするも、有生の類の無量の怖苦を受けしむるを致さざるのみと
- ⑤ 復た口腹の故を以て、有生の類をして無量の怖苦を受くる使ひを致さざるやと

☆ポイントを決めて
 選択肢を吟味しよう！

書き下し文

蘇文忠公獄を出でてより後、但だ已に死せる物のみを食ひ、絶えて一の生けるものをも宰殺せず。自ら謂へらく、「求むる所有るに非ず。己の親ら患難を経ること、鶏鴨の庖厨に在るに異なる無きに因りて、復た口腹の故を以て、有生の類をして無量の怖苦を受けしむるを致さざるのみ」と。今未だ肉を断つ能はざれば、当に文忠公の此の戒めを守るべくして可なり。

現代語訳

蘇文忠公は監獄を出てからというもの、すでに死んでいるものの肉だけを食べて、生きているものを食肉にするため殺したりすることは決してなかった。蘇文忠公が自ら言うには、「(そうすることで)何か求めていることがあるわけではない。自分自身が獄中で憂いや困難を経験したことは、ニワトリやアヒルが台所にいることと異ならないので、自分の腹の足しのために生きているものに量り知れない恐怖と苦しみを受けさせたくないということだ」と。いまだに肉食を止めることができないのなら、蘇文忠公のこの戒めを当然守るべきで、それだまあ認められる。

重要語句

□ 未能 再読文字の「未」と動詞の「能」の組み合わせで、「いまだくあははず」と訓む。「いまだくできない」の意。

解答

⑤

二重否定に関する問題である。否定語の「不」「無(莫)」「非」を重ねると、原則として強い肯定となる(ただし、「非」が上にくる場合は弱い肯定となるが、これは次の講で扱う)。本文3行目にある「莫不称其德矣」が典型的な二重否定の構文で、「其の徳を称せざる莫し」と訓み、「その(蓮の)徳を称賛しないものはない」と解釈できる。

さて、傍線部の一文は、否定語の「無」と「不」で名詞の「一」を挟んでいる。これは構文として覚えておこう。「無A(名詞)不B(動詞)の形で、「AとしてBせざるなし」と訓み、「BしないAはない(どんなAもBする)」という強い肯定の意となる。

なお、傍線部の一文では、文末に形式名詞の「者」が補われているので、「者」から「無」に返り、「一として人の採択に資すべからざる者無し」と訓めば良い。

この時点ですでに正解は⑤で確定しているが、解釈もおおこう。直訳すれば、「一つとして人の採択に資することのできないものはない」となる。本文では、蓮は実から茎・節に至るまであらゆる部分が役に立つと述べられていた。傍線部の「一」とは「蓮の一部分」のことである。これを踏まえて意識すれば、「蓮はどここの部分も人に資する」となる。よって、⑤は解釈も適当である。

その他の選択肢はいずれも、①「無かれ」、②「無からん」、③「無からん」、④「可とせざる」と、書き下し文に誤りがある。

選択肢チエック

問 傍線部A「無_下一不_レ可_レ資_二人採_一者_上」の書き下し文と解

釈の組合せとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

A 無_下一不_レ可_レ資_二人採_一者_上

無ニA 不_レB

① 一_レとして人の採_一者に資すべからざる者無_レかれ

AとしてB(せ)ざるなし

一人残らず蓮を採集する作業をしなければならぬ。

BしないAはない

② 一_レとして人に採_一者に資すべからざる者無_レからん

(どんなAもBする)

〈強い肯定〉

蓮で利益を得られない人は一人もいないだろう。

③ 一_レとして人の採_一者に資するも可_レとせざる者無_レからん

蓮を人に贈ることを悪いという者は一人もいない。

④ 一_レとして人の採_一者に資するに可_レとせざるは無し

人はだれでも蓮を採集してよいという気持ちになる。

⑤ 一_レとして人の採_一者に資すべからざる者無し

蓮はどこの部分であれ採集すれば必ず人の役に立つ。

書き下し文

蓮の物たる、之を愛する者或いは臭味を以てし、或いは芳沢を以てするも、未だ能く其の徳を知る者有らざるなり。周子之が説を為してよりして、人其の徳を称せざる莫し。然れども未だ其の才に及ばざるなり。
窃に用の大なる者を見るに、実と根とは以て籩豆に供すべく、以て民の食に充つべく、以て疾疢を療すべし。細かきは葉・鬚・茎・節に至るまで、一として人の採_一者に資すべからざる者無し。

現代語訳

物として蓮を愛好する者は、ある者は香りを挙げ、ある者は姿の美しさを挙げるが、いまだ蓮が持ちあわせる徳を十分に理解した者はいない。周子が「愛蓮説」を提出してからは、その徳を称賛しない者はいない。だが、蓮の持つ才(実用的な価値)には及んでいないのである。
ひそかに蓮の主たる用途を考えてみると、実と根は祭祀において供され、民の食事に充てられ、熱病の治療にも用いられる。細かいところでは、葉・花のおしべ・茎・節にいたるまで、一として人が採取して役に立たない部分はない。

重要語句

□ 為物 「為」には「ために」「たり」など多くの訓みがあるが、本文では「物たる」と訓む。「物」として「の意」。

解答

①

まず、「非」と「不」を重ねて二重否定であることに注目しよう。前講で少し触れたが、ここでは、「非」が上にきているので弱い肯定である。

なぜ二重否定に強い肯定と弱い肯定があるのか？ それは、「不」「無」「非」の否定語がそれぞれ否定するものの違いによる。

まず、「無」は存在を否定するので、二重に否定されると、「〜でないものはない＝必ずある」と強い肯定になる。同様に、動作を否定する「不」も、「不可不〜（〜せざるべからず）」「不得不〜（〜せざるをえず）」のように間に動詞を挟む形をとって、「〜しないわけにはいかない」と強い肯定になる。

これらに対し、「非」は物事の性質や帰属を否定するのみであって、存在そのものを否定するわけではない。それゆえ、二重否定をとると、「〜でないわけではない」という形の弱い肯定となるのである。傍線部も、「非不」で弱い肯定である。

次に、「靈於鼠」が比較形であることがポイントだ。ここでの置き字の「於」は、上に形容動詞の「靈なり」があるので、比較の用法である（↓第1講参照）。したがって、送り仮名も「鼠ヨリモ靈ナ（ラ）」となっている。「靈なり」は、選択枝文からも分かるように、「賢い・優れている」の意。「靈長類」と言うときの「靈」もこの意味である。

以上のとおり、二重否定と比較形とを踏まえて傍線部の前半を直訳すると、「人間は鼠よりも優れていないということはないが」となる。人間は鼠よりも優れているけれども、人間は鼠を捕まえることができなくて（不能於人）、猫（狸奴）にはできる（能於狸奴）、ということである。

よって、「人間は鼠よりも賢くすぐれているのだが」とある①が正解と判定できる。

②は「鼠ほどすばしこくない」、③は「飼いならす」がそれぞれ誤り。④は「靈長類の最たるもの」では比較でなく最上級である。⑤は「鼠ほどずる賢くはない」が誤り。二重否定の意味を取り違えている。

二重否定にして、部分否定と全部否定にして、一度しっかりと理屈を理解することが肝心だ。『新装版新・ゴロゴ漢文』では例文つきで詳しく解説しているので、活用してほしい。

選択肢チエック

問 傍線部A「人**非不**靈**於**鼠、制**レ**鼠**不レ能**於人**而能**於狸奴」とあるが、どのようなことを言っているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

弱い肯定「～ないわけではない」
比較「～よりも」
あたはず「～できない」

- ① 人間は鼠よりも賢くすぐれているのだが、鼠をおさえることができるのは、人間ではなくて猫である。
- ② 人間は鼠ほどすばしこくないので、猫を利用するのだければ、鼠を追い出すことができない。
- ③ 人間は鼠よりも知能が発達しているのだが、猫を飼いならすようには、鼠を飼いならすことはできない。
- ④ 人間は霊長類の最たるものなのだが、現実には鼠を支配することができないのは、人間ではなくて猫である。
- ⑤ 人間は鼠ほど賢くはないので、猫を捕まえることはできても、鼠を捕まえることまではできない。

書き下し文

噫、人鼠よりも靈ならざるに非ざるも、鼠を制すること人に能くせずして狸奴に能くす。狸奴人よりも靈なるに非ざるも、鼠狸奴を畏れて人を畏れず。然らば則ち彼各職有るなり。君子の其の職に居る者も亦た其の職を尽くすのみ。

現代語訳

ああ、人間は鼠よりも賢くすぐれているのだが、鼠を捕まえることに關しては、人間にはできなくて猫にはできる。猫は人間よりも賢くすぐれているというのではないが、鼠は猫を恐れて人間を恐れない。だとすれば、それぞれにはそれぞれの役割があるのである。君子もまたその役割を全うするのみである。

重要語句

□ 而已矣 「のみ」と訓む。文末に置かれ、強意を表わす。

解答

①

傍線部は、「非六十万人」「不可」と、否定語を用いた句が2つ並べられている。このような形を「否定の連用」と言い、上の句が条件（〜でなければ）、下の句が帰結（〜ない）を表す。上の句の訓み方を整理しておこう。

不A（不B） A（せ）ずんば（Bせず）

無A（不B） Aなくんば（Bせず）

非A（不B） Aにあらざれば（あらずんば）（Bせず）

傍線部では、「非六十万人」が条件、「不可」が帰結となっていて、「六十万人に非ざれば（非ずんば）可ならず」と訓む。よって、①が正解と判定できる。「六十万人の軍勢でなければ認められない（可ではない）」ということである。

②・④は「非ずして」が誤り。③・⑤は、「非」を動詞ととれば、「非として」と訓めないこともない（「否定する・認めない」の意）。しかし、王翦は李信の「二十万人も要らない（不過二十万人）」という発言を受けて、もっと必要だと言いたいわけだから、否定するというのは文脈的に不自然である。

なお、本文は第9講に続くものである。敵の軍勢の五倍であったら攻撃して破る、というのが兵法の「常」であった。王翦はこの鉄則を守り、荊を伐つには兵は六十万人いなければ駄目ですと始皇帝に答申したのである。

選択肢チエック

否定の連用

くでなければ(条件)・くない(帰結)

問 傍線部A「**非**六十万人**不**可。」の読み方として最も適当なものはどれか。次の①～⑤のうちから一つ選べ。

A 非^レ六十万人^レ不^レ可。

- ① 六十万人に非ざれば可ならず。↑条件節として訓んでいるのは①のみ
- ② 六十万人に非ずして可ならず。
- ③ 六十万人を非として可とせず。
- ④ 六十万人に非ずして可ならざらんや。
- ⑤ 六十万人を非として可とせざらんや。

書き下し文

昔秦の始皇李信に問ひて曰はく、「吾荆を取らんと欲す。将軍度るに幾何の人を用ひて足るや」と。李信曰はく、「二十万人を過ぎず」と。又王翦に問ふに、曰はく、「六十万人に非ざれば可ならず」と。始皇信をして荆を伐たしむ。既にして軍敗れ、復た翦を使はんと欲す。翦曰はく、「大王必ず已むを得ずして臣を用ふれば、六十万人に非ざれば可ならず」と。始皇之に従ひ、遂に荆の地を平らぐ。

現代語訳

かつて秦の始皇帝が李信に尋ねて言うには、「私は荆を奪いたいと思う。將軍はどれだけの兵があれば足りると考えるか」と。李信は言った、「二十万人を超えることはありません」と。同じことを王翦に尋ねると、言った、「六十万人はいなければ駄目です」と。始皇帝は李信に荆を伐たせた。結局軍は敗れ、今度は王翦を起用しようとした。王翦は言った、「大王様、やむをえず私めを用いるとこののでございますならば、兵は六十万人でなければなりません」と。始皇帝は王翦の意見に従い、荆の地を平定した。

重要語句

- 幾何 「いくばく」と訓む。「どれくらいか」と程度を問う表現。
- 欲 返読文字で「(せ)んとほす」と訓む。「しよつと思ふ」の意。(↓第2講参照)